

# 異文化をフィールドで学ぶ

## —環境科学科における学生海外研修の事例から—

Learning about Other Cultures through Field Work  
—Reports on Overseas Study Tours for Environmental Science Students—

大倉 健宏<sup>1</sup>, 原田 公<sup>2</sup>, リンチ・ジョナサン<sup>2</sup>

<sup>1</sup>麻布大学生命・環境科学部地域社会学研究室,  
〒252-5201 神奈川県相模原市中央区淵野辺 1-17-71

<sup>2</sup>麻布大学生命・環境科学部国際コミュニケーション研究室,  
〒252-5201 神奈川県相模原市中央区淵野辺 1-17-71

Takehiro OKURA<sup>1</sup>, Akira HARADA<sup>2</sup> and Jonathan LYNCH<sup>2</sup>

<sup>1</sup>Seminar of Community Sociology, School of Life and Environmental Science, Azabu University,  
1-17-71 Fuchinobe, Chuo-ku, Sagamihara, Kanagawa 252-5201, Japan

<sup>2</sup>Office of International Communication, School of Life and Environmental Science, Azabu University,  
1-17-71 Fuchinobe, Chuo-ku, Sagamihara, Kanagawa 252-5201, Japan

---

**Abstract:** This paper reports on the overseas training conducted over a long period by the Office of International Communication and by the Regional Community Research Laboratory (formerly the Environmental Sociology Research Laboratory) in the Department of Environmental Science, School of Life and Environmental Science, Azabu University, Japan.

As of October 2017, a total of 48 separate overseas programs have been conducted: 24 programs led by Mr. Akira Harada in the Office of International Communication, 16 programs led by Mr. Jonathan Lynch in the same office and 8 programs by Associate Professor Takehiro Okura in the Seminar of Community Studies. These programs have been conducted in a total of 7 different countries: Australia, Indonesia, Malaysia, the United Kingdom, Cambodia, the Philippines and the United States.

In this report, we will review the learning derived from the overseas study tours in terms of field work. Furthermore, we aim to show examples of student learning across national borders, focusing on the goals and reports implemented within each laboratory.

In Harada's report, the themes that have emerged from his numerous study tours are reviewed. Lynch's report gives details of the implementation and organizational methods used for his tours, and in Okura's report, a chronological review of his overseas programs is presented. In each of the three reports, comments by participating students are provided for reference.

**Key words:** Field Work, Overseas Study Tours, Cross-cultural Communication, Environmental Science

## 1. はじめに

大倉健宏, 原田 公, リンチ・ジョナサン

本実践報告では、麻布大学環境保健学部環境政策学科および生命・環境科学部環境科学科において、国際コミュニケーション研究室および地域社会学研究室(旧環境社会学研究室)により、ながく実施された海外研修について報告を行う。

環境科学はさまざま学問領域からの、学際的なアプローチが求められる。このことの意味は、さまざまな角度から対象に光を当てることで、立体的なりアリティを浮かび上がらせることができることであろう。同じアプローチは本報告で取りあげる海外研修でも有効である。この営みの結節点としては、異なる視点や対象において実施された、フィールドワークの結実の相違点を比較することではないだろう。それよりも環境科学という共通項を介して、「フィールドの知」という公約数を探る営みになるであろう。本報告ではこの意味での「フィールドの知」を浮き上がらせ、それぞれの研究室での実践の立ち位置を明らかにしたい。

本報告は環境科学科の研究室による《海外研修》と銘打ってはいるものの、その狙いや研修へのアプローチさえ三者三様で、共通点よりは相違点の方がむしろ顕著かもしれない。ただ、或る思いは三篇のあいだに通奏低音のように横たわっているように思う。机上で学ばれた学生たちの硬直した知識をいちど壊して、《世界というテキスト》を読み解くことでなんとか血の通った知見へと変えてやりたいという願いである。

学生たちは、フィールドワークを通して知識と経験を得るだけではなく、躍動するフィールドワークの醍醐味、社会調査の実践的なスキル、語学学習のモチベーションなど、海外スタディツアーが学生にもたらす利益はたいへん大きい。

2017年10月現在、国際コミュニケーション研究室・原田講師による実施は24回、同リンチ講師による実施は16回、地域社会研究室・大倉准教授による実施は8回となっている。訪問国はオーストラリア、インドネシア、マレーシア、イギリス、カンボジア、フィリピン、アメリカの合計7か国である。本報告では海外研修ツアーでの学びをフィールドワークとして再

考する。さらに、それぞれの研究室での実施目標や実施報告などを中心として、国境を超えた学生の学びについて事例を示すこととしたい。

原田報告では、これまでの熱帯国を中心とする研修について、それぞれのテーマとともに振り返った。リンチ報告では、16回の実施経過と、スタディツアーのオーガナイズ手法について詳細に論じた。大倉報告ではこれまでに実施したスタディツアーを、テーマの変容と再構築から論じた。くわえて協力者の存在と引率者に求められる知識について言及した。いずれの報告においても参加学生によるコメントを掲載し参考に供する。

## 2. 「熱帯林問題」をめぐる

ガバナンス・ギャップの溝を探るスタディツアー

原田 公

### 2-1. はじめに：製品の原料由来を辿る旅

企業によるグローバル規模の活動が拡大するのにもない、パーム油、コーヒー、ティッシュペーパーといったコモディティ化された一次産品の生産由来を辿ることは難しくなっている。そうした中で、生産現地で生起しているさまざまな問題に対する目配りが日本をふくむ消費国側で少しずつ共有されてきている。フェアトレードツーリズムやレスポンシブルツーリズムといった現地のコミュニティを基盤とする小規模ツーリズムがマスツーリズムのカウンターとして1980年代半ばから登場する(Ashley et al., 2000)。日本でも国際環境NGO FoE ジャパンやアジア太平洋資料センター(PARC)などの非政府団体が「スタディツアー」と呼ばれる、開発現場での視察やフェアトレード生産者への訪問などを盛り込んだツアーを主催している。大学の講義で学生たちは「気候変動」、「熱帯林消失」といった問題についていくらか硬直した紋切型の情報や知識を持っている。ゼミ学生を主な対象として自分が組織してきた《熱帯林問題ツアー》では、机上で学ばれた環境問題を現地で被害を受けている住民の視座になるべく近づいて、問題をより包括的な視点で見つめなおすことを目的としてきた。現場でのめぐるめくような体験を通して硬直した知識、情報の血肉化をうながしたいとい

表1 国際コミュニケーション研究室主催《熱帯林問題》スタディツアー

実施時期	参加学生 (学科/学年/人数)	おもな視察地
2003年 8月7日～15日	環境政策学科3年生7名、 同2年生1名	ブキ・ティガブルー国立公園
2004年 8月1日～8日	環境政策学科4年生1名、 同1年生3名	ブキ・ティガブルー国立公園、テッソ・ニーロ
2006年 3月20日～27日	動物応用科学科4年生1名、 同3年生1名	ブキ・ティガブルー国立公園、テッソ・ニーロ
2008年 9月1日～13日	環境政策学科3年生12名	テッソ・ニーロ、ドリアン・チャチャール、 ブキ・ティガブルー国立公園
2009年 8月9日～20日	環境政策学科3年生1名	ケルムータン、カンパール半島
2010年 8月10日～22日	環境政策学科4年生1名、 環境科学科3年2名	ケルムータン、カンパール半島
2013年 8月17日～29日	環境科学科3年1名、 食品生命科学科3年生1名	カンパール半島
2016年 8月30日～9月12日	環境科学科3年1名、 同2年1名	(マレーシアサラワク州) バラム河上流域、 アナップ・ムプット森林管理区
2017年 8月28日～9月13日	環境科学科3年3名	(マレーシアサラワク州) バラム河上流域、 アナップ・ムプット森林管理区

うのが《ツアー》の狙いである。《熱帯林問題ツアー》の概要を表1に示す。

## 2-2. 研修に向けた準備

研究室主催のスタディツアーでは、事前の準備として、日本の市場に入ってくる熱帯農林産物（パーム油、合板、コピー用紙など）の需給情報、製品の受入れ企業の調達・CSR方針、現地国の法令について概略を学ぶとともに、NGOの活動家や研究者を招聘しなるべく複数の視点による問題アクセスを提供することを心掛けている。研究室では日本の製紙工場でパルプ原料に使われる海外産木材チップの由来の問題も扱っている。事前学習の一環でこれまで数回、国内製紙会社のパルプ・製紙工場を訪問している。研修先の豪州タスマニアから到着したばかりの専用運搬船から工場のチップヤードに搬入される場面に遭遇したこともある。

インドネシアのリアウ州でもマレーシアのサラワク州でも、現地では、コンセッション（森林開発事業権）企業とのあいだで土地権をめぐる軋轢を抱えるコミュニティにファシリテーションをおこなっている現地のNGOとともに入り、被害住民宅にホームステイすることで住民の生活を短期的な参与観察を通して見聞する機会を多く取り入れている。

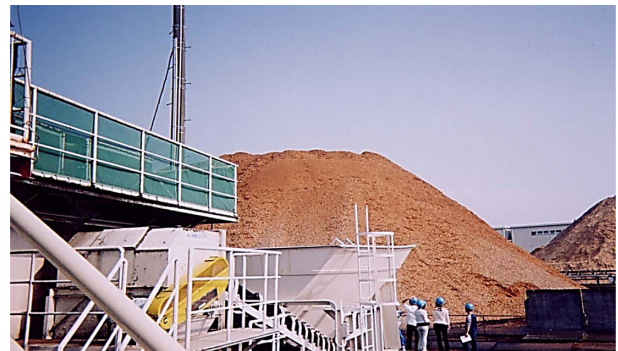


写真1 静岡県内の大手製紙工場のチップヤードにて  
(2003年 静岡県)



写真2 火災が蝕む泥炭湿地を歩く学生  
(2009年 リアウ)





写真3 産業植林の影響を漁撈民に聞く  
(2010年 リアウ)

### 2-3. 背景：原料サプライチェーンの川上と川下で 起こっている問題

日本という消費国の店頭やインターネット上で喧伝されている商品広告のレトリックと商品の原料生産にともなう現地住民の受苦の間に潜在する《ガバナンス・ギャップ》の深い溝をどう捉え、埋めていくか。以下に、インドネシアのスマトラ・リアウ州でおこなったゼミツアーについて概観する。リアウは日本で使用されているコピー用紙のおよそ3分の1の原料供給源、製品加工地である(原田, 2012)。マレーシアのサラワク州から輸出される合板製品の過半は日本にきている。

生産国側の問題も一方にある。森林ガバナンスの脆弱性の問題が熱帯国でよく指摘されている。インドネシアやマレーシアでは伐採権や産業植林の事業権ではコンセッション方式が取られており、政府(国や州の林業セクター)から企業に対し森林の利用権が付与される。インドネシアでは、産業造林コンセッション内で一定の面積について地域住民とのパートナーシップ事業に割り当てなければならないことが法令で定められている(政令No.6/2007)。森林に生業を依存する先住民(ダヤック)が多いマレーシアのサラワク州では植民地化された際に、土地区分を明確化する目的で制定された土地区分法(Land Ordinance 1948)において先住慣習権の土地が明確に定義され、この区分が現行法の基盤となっている。このように住民との土地紛争を予防する法的な手立ては一応あ

るものの、行政レベルの執行能力や事業権発効にともなう企業側との贈収賄をめぐる汚職を許容してしまう構造的な問題などのために、たとえ土地を奪われた住民側が裁判所に提訴しても、かれらに有利な判決が下されることは非常にまれである。

### 2-4. 現場で見たことにどう対峙するか

熱帯林の持つ多様性の痕跡を微塵も残さない、緑の砂漠と化したプランテーション造成を目の当たりにし、土地を奪われた被害住民の底知れない苦悩の一端に触れることで、学生たちは価値観の変容を促すような《化学反応》を経験し始める。理解し難い事態の背後に潜在する《原因》に対して自ら持てる知識や経験を動員して解答探しをはじめめるのだ。筆者の主観的な観察だが、夏季におこなうスタディツアーを境に前期と後期で、テーマに取り組む真剣度が俄然、変わってくる学生は多い。帰国後に環境NGOのインターンやボランティアとなって、前線の現場で見聞きしたことを多くの他人に伝えようと活動をはじめめる学生もいる。ただ、卒業後のキャリア選択で研究室の海外研修が学生たちにどう影響したのかは単純にはわからない。《熱帯林問題》に個人としてどう対峙したか、たとえ教員でもかれらの内面の機微を探ることは難しい。しかし、卒業後に選択し、蓄積しているキャリアを見るとき、ひとつの符合が浮かび上がってくるような気がする。森林科学や林学のプロパーでもない学科だが卒業後に林業という環境と経済に直接向き合う職業に就いた者が複数いる。そのうちの数名とはいまでも、本学と学術協定を結んでいるNPO法人がおこなっている神奈川県相模湖湖畔におけるスギ人工林の定期整備活動で一緒になるのだが、会うたびに遅くなるかれらの姿を見るにつけ、《現場》への扉を開けた筆者の責任がわずかでも果たされたかのように感じている。

ゼミの卒業生で現在、日本の環境NGO(熱帯林行動ネットワーク)でインドネシアのプランテーション開発問題に関する調査、提言活動に携わっている中司喬之くんについて触れる。かれは、インドネシアを中心にアブラヤシ農園のさまざまな問題の調査・分析、また住民ベースの小規模農園の紹介活動もおこなっている。インドネシア語を流暢に使いこなす情報収集力は多くのNGOから評価されている。自分



写真4 左：2006年度卒業の新津裕くんのインタビューがアウトドア誌に取り上げられた。

「林業に関わるきっかけは？」との問いに、学生時代に研究室の海外視察で目撃した破壊的な伐採現場での衝撃とその受け入れ先が日本と知ったときの驚きと答えている。新津氏はプロの林業家としてキャリアを積む一方、狩猟普及の活動にも関わっている。

写真5 上：2015年11月30日付け「静岡新聞」より。

国内有数の林業地、静岡県天竜の森林管理会社で働く齋藤駿一くんが取材に答えて、「東京都出身。静岡に縁はなかった。大学で環境を学び、温暖化対策や国土の保全を身近な課題として見詰めた」と、林業に就いた動機を語っている。齋藤君は在学中、エコリーグ（全国青年環境連盟）のインターンとして日本国内の大学における紙資源削減プロジェクトに関わっていた。

も折に触れ、かれの貴重な現場データの恩恵にあずかっている。中司くんはスタディツアーの意義について以下のようなコメントを寄せた。

在学中にスタディツアーを通じてじっさいにインドネシア・スマトラに訪問し、そこに住む人々に触れることで、問題に対する理解が深まると同時に、これらの問題を包括的に捉えたとき、その背景にあるあまりの複雑さに正直なところ無力感を感じました。その一方で、現地とのつながりを見失ったことによるある種の責任感を感じるようにもなりました。

現在ではさまざまな媒体を通じて簡単に情報を得ることができますが、自分の経験を振り返ればそのような学びは「他人事」として理解を深めることに過ぎません。現場に足を運び五感で感じながら学ぶことにより「自分事」として理解を深めることにつながったように思います。このような経験が、現在の活動の基盤になっています。（2017年9月付け電子メール私信による）

2-5. おわりに：果たして《第三者》の立場は可能か？

《熱帯林問題》の全体像をとらえることは難しくなっている。《熱帯林問題》への取り組みは近年、いわば分業化が進められている。住民参加型保全、持続可能な森林経営といった現場レベルでの活動、あるいは企業によるCSRサプライチェーン管理などの消費国側での取り組みといったように、個別の枠組みに落とし込まれた分業領域での活動が増えている。その一方で、身を粉にして働き続けてようやく手に入れた土地を挙句の果てに強制収容された農民が味わう受苦を我がこととして受け止めることは難しくなっている。ましてや、食用油（アブラヤシ）やコピー用紙（アカシア植林）などの日常的なコモディティとはいえ、遠い熱帯国の原料生産現場で起こっている人権問題に思いを馳せることは至難の業といっていよいよだろう。

《熱帯林問題》を我がこととして引き受けるにはどうすればよいか？やはり、現場に足を運ぶ以外にないのではないだろうか。





写真6 神奈川県相模原市緑区与瀬にて。二藤政毅くん(右)と齋藤駿一くんは在学中からスギ人工林の整備活動を進めるNPO緑のダム北相模と協働して林業スキルを磨いてきた。現在は林業家としての仕事の合間を縫って、嵐山で麻布大学学生や若い中学生など後進の指導にあたっている。(画像提供 緑のダム北相模)

I am a friend  
of the Earth  
Vol.2

**脱・使い捨て社会をめざして  
長期的にボランティア**

永藤みゆきさん  
(学生・個人サポーター)



麻布大学で環境政策を学んでいた永藤さんがFoE Japanのサポーターになったのは2002年のことでした。「以前からファストフードやコーヒーショップの店舗内で使われている使い捨て容器が気になっていて、それをリユース容器に転換するよう働きかけているFoE Japanの活動に自分も参加しながら応援しようと思ったんです。」

消費者は本当はどんな容器で飲みたいと思っているのか、街頭アンケートを行ったり、脱・使い捨て政策で一步先をいく韓国の現地調査にも参加しました。「韓国でできているのなら、日本でもぜったいできると思って、ますます活動が面白くなりました。」

大学では森林政策を学び、インドネシアの天然林の破壊の様子を調査したり、他の団体のインターンもしながら、FoE Japanの脱・使い捨て社会プロジェクトの活動にも継続的に参加してきました。

4月から紙の卸会社に就職し、関西勤務に。もともと関西出身の永藤さんは「関西でも引き続き活動に参加したいので、FoEの関西支部をつくりたい」と頼もしい一言。持ち前の明るさで仲間を増やしていってくれることでしょう。

写真7 国際環境NGO FoE Japanの広報誌Green Earth Vol.18で紹介された、小林みゆき(旧姓永藤)さん。



写真8 カヌー下りの最終上陸地で(2008年 リアウ)



写真9 国立公園内に居住する先住民集落で(2006年 リアウ)



写真10 盗伐グループとの思わぬ「呉越同舟」。熱帯林でともに一夜を過ごす(2013年 リアウ)



写真11 プナン人との狩猟体験。ヒゲイノシシの戦果を前に(2016年 マレーシアサラワク)

分野やテーマにかかわらず、現場の視点が重要なのである。現場での経験があれば、自分が体験していないことに対して、あるいは行ったことのない場所での出来事に対して、想像力を働かせやすくなる。想像力が豊かになれば、自分と対極にある人の痛みを理解することも可能となる。多くの人が、自然に身につけてきた、あるいは専門家として「つくられる」過程で身につけてきた行動パターンを相対化し、生活者指向的対応とテクノクラットの対応を意識的に行き来しながら問題を検討するような、そんな成熟した市民社会を創成したいものである(井上, 2012)。

つねに生活者としての皮膚感覚を併せ持つ、しなやかな研究者の身のこなし方を学生に修得してほしいと思っている。

最後に、《熱帯林問題》に関連したテーマによる卒論のタイトル一覧を表2に掲げる。

表2 国際コミュニケーション研究室主催「熱帯林」卒業論文タイトル

制作年度	氏名	論文タイトル
2003年度	乾 治郎	日本のコンクリート型枠と南洋材の関係
2005年度	角田輝久	インドネシア・スマトラ島における急激な森林減少と違法伐採
	永藤みゆき	EUにおける木材調達方針
2006年度	新津 裕	国産材の普及促進における認証制度の役割—山梨県における対策を中心に可能性を探る—
2008年度	安藤彰矩	スマトラ島先住民の伝統的非木材林産物—タラン・ママ人の熱帯林保全—
2009年度	伊藤あすみ	スマトラ島リアウ州先住民の非木材林産物と森林破壊について
	中司喬之	FSC Controlled Wood (管理木材) について—FSC 森林認証の瑕疵—
2010年度	関 拓未	インドネシアの泥炭湿地における企業と住民の軋轢について
2011年度	齊藤駿一	大学におけるコピー用紙の使用の現状とインドネシアの森林破壊について
	安井 一	インドネシア・スマトラ島の森林消失—住民主導型の森林管理—
2012年度	佐藤千明	スマトラ島リアウ州の先住民の生活と環境について
2013年度	青柳景介	インドネシア・スマトラ島における森林保護の現状



### 3. 住民参加型サンゴ礁保全をめぐる 海外スタディツアー

リンチ・ジョナサン

#### 3-1. はじめに

生命環境科学部に所属する英語教員として、筆者は2002年以来、毎年環境に配慮する海外スタディツアー（エコツアー）を企画・実施している。このスタディツアーは「ゼミ活動」の一環として行われ、おもに3年生を中心に組織されている。《サンゴ礁の環境保全》をツアーのテーマのもとに、以下のような目標を掲げている。

- 英語のコミュニケーション能力を改善する。
- サンゴ礁の生態系について学ぶ。
- サンゴ礁が直面している環境問題を学ぶ。
- 問題と解決方法について、海外の若者と議論する。
- 人と海とのつながりについて理解を深める。
- 現地のメンバーとの異文化交流
- ホームステイ体験と観光

表3 国際コミュニケーション研究室主催《サンゴ礁》スタディツアー

Year	Country	Location
2002年	インドネシア	セラヤクチル島、コモド国立公園
2003年	フィリピン	パラワン島
2003年	インドネシア	バホ村（スラウェシ島）
2004年	インドネシア	ブナケン島（スラウェシ島）
2005年	インドネシア	ブナケン島（スラウェシ島）
2006年	イギリス	ロンドン（一般的な環境問題）
2007年	カンボジア	シェムリアップ（一般的な環境問題）
2008年	インドネシア	ブナケン島（スラウェシ島）
2009年	インドネシア	ブナケン島（スラウェシ島）
2010年	インドネシア	ブナケン島（スラウェシ島）
2011年	インドネシア	ブナケン島（スラウェシ島）
2012年	インドネシア	バリ島
2013年	インドネシア	バリ島
2014年	インドネシア	バリ島、ヌサベニダ島とコモド国立公園
2015年	インドネシア	ブナケン島とレンベ海峡（スラウェシ島）
2016年	インドネシア	ブナケン島（スラウェシ島）

#### 3-2. スタディツアーの背景と目的

エコツアーは大学生が一般的に参加するツアーとは若干異なる。より一般的なツアーでは、海外の語学学校での語学研修、ホームステイ、ボランティア活動、教員主導のリサーチツアー、またはこれら組み合わせものなどさまざまである。こうしたタイプのツアーにもそれぞれ利点があるのはもちろんだが、ここでは「自然環境の保全」をテーマとしたツアーが参加者に与えるメリットを列挙する。

- アクティビティをおこなうためのコミュニケーションツールとして英語を使用する。
- ツアーは体験活動参加型を基盤としている。
- 参加者は環境問題を直接に参与観察する。
- 参加者は現地住民が受ける環境問題のさまざまな影響について学ぶ。
- 参加者は現地の青年と活動の協力関係を構築する。



写真12 インドネシア人学生と交流の様子



写真13 協同学習の一場面



- 参加者は環境問題を現場で観察・検証。議論をおこなう。
- 参加者は環境問題に対する解決策を観察・検討・議論する。
- 参加者は現地の青年とのディスカッションを通して国際感覚を育む。
- 参加者はモニタリングおよび環境保護活動に参加する。
- 参加者はプログラムの終了後もソーシャルメディア(SNS)などを通して交流を継続する。
- ツアーは途上国を対象としている。
- 旅行業者を介さないためツアーの参加費用は低めに設定される。
- ツアー体験は参加後の発展的な英語学習の契機を提供する。

「自然環境の保全」をテーマとしたツアーを教員と参加学生だけで組織することは難しい。現場に精通した実務者の介在が必要になる。そのような場合、環境問題に関与している現地のNGOがさまざまなサポートをしてくれることもあるだろう(Neale, 1999)。ただ、現地との間で直接の人脈が確立されていない場合は、この分野で経験と人脈を持っている組織や人の協力をあおぐことが最善の方法だ。一般の人が参加できる「自然環境の保全」をテーマとしたツアーを主催している組織の一部を文末の「ノート」に掲げた。

インドネシアのコモド、スラウェシ、バリ、そしてフィリピンのパラワンのツアーはステファン・オトマンスキ氏をツアー・コーディネーターとして迎えた。



写真 14 オトマンスキ氏

かれはフリーランスの環境プログラム・コーディネーターであり、この分野では東南アジアや日本で多くの経験を積んだプロフェッショナルとして知られた存在である。2002年のジャパン・タイムズの記事でオトマンスキ氏が主催したツアーが紹介されていた(Hesse, 2002)。2002年にオトマンスキ氏をツアー・リーダー/コーディネーターとする、インドネシアでの最初のプログラムを企画・実施した。かれは麻布大学で環境学を学ぶ学生たちに合ったプログラムを設計してくれた。地元スタッフを雇い、現地の学生を組織して参加者として参加させた。以降、一連のエコツアーはオトマンスキ氏と連携して実施された。

「エコツアー」という用語は幅広い意味で使われている。ボルネオのオランウータン観察プログラムから北海道のバードウォッチング旅行に至るまで、自然や野生動物に関わるさまざまなツアーに対して用いられている。もっとも一般的には、エコツアーは自然の場所や生物を鑑賞するための低インパクトの旅行と定義されている(Bien, 2003)。

オトマンスキ氏はスラウェシ島へのエコツアーに際して、サンゴ礁の生態系、珊瑚礁の脅威、傷ついたサンゴを回復させるための取り組みといった条件を考慮して、プログラムに好適の場所として海洋国立公園内にあるブナケン島を選んだ。その選択理由は次のとおりである。

- a) 深刻な被害を受けたサンゴ礁から美しいサンゴ礁まで、スノーケリングで探索できるサンゴ礁の数が多。
- b) 親しみやすい地元の村は外部者にも友好的で、ホームステイのための学生受け入れの態勢が



写真 15 シュノーケリングによるリーフチェックをおこなっている麻布大学の学生と地元のスタッフ

整っている。

- c) プログラムに参加することに関心のある現地学生たちがいる。
- d) 地元NGOのメンバーはスタッフとしてプログラムに参加する意思がある。

### 3-3.1 ツアーの活動

2002年以来、麻布大学の学生は、インドネシアのブナケン島とその他の目的地を何度も訪れてきた。かれらはツアー中にさまざまな活動に参加した。各ツアーでは、学生たちにサンゴ礁の生態について基本的なことを理解させることを目指している。サンゴ礁では、サンゴ、魚、サンゴに関わるその他の生物を特定するために、毎日数時間、スノーケリング活動を行う。異なるサンゴ礁のゾーンの地図を作成したり、魚の種類や行動をスケッチしたり、水中カメラを使ってさまざまなサンゴ礁の写真を撮影したり、異なる種類のサンゴ礁を比較したりする。

サンゴの生態系を理解した後、学生たちはサンゴ礁の健康状態の測定をおこなう。サンゴ礁のモニタリングでは世界中でさまざまな方法が使用されている。そのひとつに国際的な海洋保護団体のリーフ・チェック・ファンデーション (Reef Check Foundation) が実施しているサンゴ礁評価方法がある。このモニタリング方法では通常、ダイバーがライントランセクト法 (line transect method) を用いてサンゴ礁を調査する。海外研修では、現地のツアー・コーディネーターが学生たちのためにスノーケリング活動によるサンゴ礁の浅い部分でのライントランセクト評価法を特別にデザインしてくれる。学生たちのサンゴ礁評価は、コーラルウォッチ (CoralWatch) という、オーストラリアのプリズベンに本拠を置くクイーンズランド大学の研究プロジェクトの一環を担っている。このプロジェクトは、サンゴの白化現象の発現を特定するために、サンゴの色の比較によって世界中のサンゴ礁を調査している。ただ、こうしたモニタリング活動でもサンゴ礁の健康状態を正確に評価するのは、サンゴ礁の生態を長年観察してきた、豊かな知見を備えた地元の専門家からの詳しい背景情報がなければ非常に難しい。そのために、サンゴの白化現象、オニヒトデの発生、ダイナマイト漁業、観光客数の増加、船舶による物理的な被害や汚染など、サン



写真 16 サンゴを食べるオニヒトデの発生

ゴ礁が直面している歴史的な問題についてのさまざまなレクチャーが研修中に組み込まれている。

サンゴ礁保全の直接的な活動もプログラムの中に組み込まれている。バリ島では学生たちは地元の住民と人工礁構造物を設置するを経験した。バリ島では構造物を作るためにコンクリートが使われていた。他の活動として、オニヒトデの駆除、海中のゴミ拾い、マングローブの植え付けなどが挙げられる。

### 3-3.2 スタディツアーの特徴

国際コミュニケーション研究室の学生が参加したスタディツアーには、通常の海外ツアーから峻別できる特徴がある。このようなスタディツアーに参加することで、学生たちはサンゴ礁が直面する環境問題について幅広い視点に立って観察することができる。さらに、直接的な参与観察による調査から卒業論文の作成に必要な各種データも入手できるのである。

多くの現地スタッフは海洋問題の専門家であり、



写真 17 ペムテラン湾の人工礁構造物





写真 18 人工礁構造物 (バリ島)

サンゴ礁保護を目的とした地元のNGOで働いている。かれらは、海洋環境について詳しい知見と、学生が訪れる地域のサンゴ礁に関する現場知識の両方を兼ね備えている。学生たちは、水中サンゴ礁調査や、人工サンゴ礁のブロックを設置するプロジェクト等、現地スタッフが企画するさまざまな活動に参加する。これらの活動を通じて、サンゴ礁の生態やサンゴ礁の現在の健康状態だけでなく同時に、サンゴ礁を保護し、また、損傷したサンゴを回復させるために採用されている方法も学ぶことができる。美しいサンゴ礁をただ観察するツアーとは異なり、この研修ツアーでは、健全なサンゴ礁と深刻なダメージを受けたサンゴ礁の両方を調べることが可能である。参加者はそれらを比較し、観察された損傷の理由を検証する機会が与えられる。現地の専門スタッフは、多くの場合、損傷したサンゴ礁の生態史を通して劣化原因の背景までも説明してくれる。学生は連日、海中で数時間を過ごす。このために、シュノーケリングツアーは肉体的にきつい活動と思われるが、ただ、サンゴ礁実相の観察と客観的な評価をおこなう上でこうした長時間にわたる活動は欠かすことができない。腰を据えたフィールドワークによって、訪れた地域のサンゴの生態系をただ学ぶだけでなく、生計のためにサンゴ礁に依存する社会におけるサンゴの役割、サンゴ礁と地域コミュニティとの関係を肌で理解することが可能になるのである。

ツアーのもう一つの特徴は、サンゴ礁の近くに住むコミュニティの家族をホストとするホームステイをすることである。ほとんどすべての場合、ホスト

ファミリーは、直接的または間接的にサンゴ礁に関連した仕事を携わっている。つまり、重要なステークホルダーとしてサンゴ礁の健康状態に生活を依存しているのだ。ホームステイ先の家族の日常生活を間近に観察し、またともに体験することにより、地域住民と周囲のサンゴ礁との深いつながりを理解することができる。当該レポートの文末に掲げている、同種ツアーの実施例を見ればわかるように、スタディツアーのユニークな利点として、学生は自分が作成する卒業論文の作成に必要な素材を直接入手し、さまざまなステークホルダーの視点からトピックを検証する機会を得ることができるという点が挙げられる。

### 3-4. ツアーのフィードバック

ツアーのフィードバックは総じて非常に肯定的だった。多くの学生たちは、参加の結果として、英語を勉強する意欲が高まったと指摘している。スタディツアー中に、すべての学生は地元の参加者やスタッフとコミュニケーションを積極的にとろうとした。この経験は、英語を単に学習の対象にするのではなく、目標を達成するためのツールとして理解するのに役立っている。学生は、相手にメッセージが理解される限り、多少不完全な英語でもコミュニケーションとしては問題がないと理解できたと述べている。ボディーランゲージを使用し、簡単なインドネシア語を学ぶことによって、コミュニケーションスキルをさらに向上させることができたようだ。



写真 19 人工礁を製作する学生たち

ツアーに参加した学生たちのコメントの一部を以下に引用する。

「このツアーの一番のチャレンジは英語を使うことでした。インドネシア側のメンバーに自分の英語が理解されたときは、とてもうれしかった」

「日本の学生は英語を使う機会がもっと必要だと思います。今回のスタディツアーは、英語を使う機会にめぐまれました。また、新しいスキルアップの目標ができました」

「サンゴ礁の問題を直接に見ることで、サンゴの生態系が直面する問題がどのぐらい深刻であるかを理解することができました。同時に、これらの問題を解決することの難しさも認識できました」

「サンゴの生態系は美しいが、場所によってはサンゴ礁は被害を受けている。サンゴ礁を再生し保護するための対策が必要だと思いました」

「地元の家族とホームステイをすることで、インドネシアの文化や生活様式を理解することができました」

「日本の文化についてプレゼンテーションをしたとき、インドネシア人たちの反応の大きさに驚きました。かれらは日本について沢山の質問をしてくれた。日本に非常に興味があるようでした」

「私にとっては、このツアーは体力的にきつかった。毎日のシュノーケリングと英語漬けの生活は厳しいものでした」

「ツアーに参加してはじめて、自分の英語コミュニケーションスキルが低いことに気づかされました。これから、もっと勉強しました海外に行きたいと思います」

### 3-5. 卒論のテーマ

以上のフィードバックが物語っているように、学生たちにとってツアーの特に最初の2～3日間はしば

しば困難を感じる。都会から隔絶した、インドネシアの遠隔地でのホームステイではカルチャーショックに遭遇し、連日の英語漬けによるコミュニケーションに疲弊し、長時間にわたってシュノーケリングをしながら海で過ごすという物理的な課題にも対処しなければならない。学生たちのフィードバックを見ると、こうした多くの苦難にもかかわらず、かれらが挑戦を楽しんで、環境問題を間近に触れ、海外の若者と環境問題について議論した経験から多くを学んだことを示している。

スタディツアーのひとつの具体的な成果は卒業論文という形となって現れる。多くの参加者はツアーでの経験に基づいて卒業論文を作成した。卒業論文の代表的なタイトルを以下に掲げる。

- 石井洋光「The situation of seaweed farming in Indonesia (インドネシアにおける海藻栽培の現状)」
- 榎本浩太郎「Immediate problem of Humphead wrasse (メガネモチノウオが直面している問題)」
- 内藤美穂「Causes of Coral Diseases and Potential Treatments (サンゴの病気とその治療法について)」
- 福原美砂「対面コミュニケーションにおけるボディランゲージの役割」
- 大場 優「Reef Blocksについて ～サンゴの再生と地域の人々によるビジネス～」
- 砂原麻美「Transplanting Corals and Reef Regeneration-Coral Transplant Project in Bunaken- (サンゴの移植とサンゴ礁の再生 ～ブナケン島でのサンゴ移植プロジェクト～)」



## 4. アメリカ研修事例報告

大倉 健宏

### 4-1. 研修の概要

麻布大学生命・環境科学部環境社会学研究室（現地域社会学研究室）では、2008年4月研究室設置からの11年間で8回のアメリカ研修ツアー・アメリカ調査を実施した。筆者が前任校においても6回にわたって学生海外研修を引率した経験があり、当初からツアーを実施することを就任当初から表明した。このことは筆者が担当する「地域コミュニティ論」（旧カリキュラムでは「地域環境調査法」）の、カリキュラム外の研究室主催によるフィールドワークとしての位置づけである。

研修の目的としては教室での学びを超えて、触知的な体験をすることである。さらに異文化に対するイメージング力を鍛えるということがある。社会調査法を担当する筆者からすれば、コミュニケーションを通じた質的調査体験ということである。2013・2014・2017・2018年の4回については、質問紙調査の実施という具体的な課題が付け加えられた。2017年からは筆者が担当する動物応用科学科「社会調査論」履修者が、このツアー参加者に加わった。回答協力者を得て調査票に記入してもらうことは、異文化体験を超えて考えや意見をくみ取る作業でもある。このように筆者が引率する研修旅行では、異文化との接し方に継続的な変化があった。このことは引率する筆者の意向もあるが、参加者とのディスカッションを通じた相互作用による側面が大きい。言い換えれば参加者が旅のありかたの方向性を定めているのである。この点は教室の学びには少ない特性である。

ガイド等を依頼しない個人旅行形式で、一人で引率可能なのは10名が上限であろうか。同時にこれらのツアーを安全に実施するためには、筆者の個人的ネットワークによる支えが不可欠であった。さらに事前学習として、異文化の入り口となる、言語や生活慣習について、コインの種類、治安・安全確保の方法などについて事前学習を行った。また参加学生にとっては自由時間が多きほど、充実度が高いことから、自由時間の訪問場所について計画を作成した。

### 4-2. 事前学習の実施とテーマの変容

本研修では毎回半年間程度、週一回1時間事前学習を実施している。事前学習は前述の異文化に対する理解に加えて、参加者各自にとっての研修テーマを見出すことが求められる。このことは研究室における卒論テーマ決定と似たプロセスとなる。参加学生に漠然としたテーマを示してもらい、関連する文献を紹介し精読してもらうということを繰り返す。このプロセスが卒業論文作成に対して、同様の作業を行うという点でトレーニングとなるのである。

2008年2009年および2010年は「持続の可能なコミュニティ」を統一テーマとした。個人テーマ決定後はそれを座標軸として、見学や訪問地など過ごし方が触知的に定まる。この意味でこのプロセスに丁寧に時間を掛けることは重要であり、研修に対するモチベーションを高める。精読する文献が英文であっても学生は苦にせず読み進める場合が多い。この時期には、テルによる「世界を救う100の方法」、コルベットらによる「サステイナブル・コミュニティのデザインーブレッジホームズからの学び」などを取り上げた。

2008年には都市における自転車利用、サステイナブル・コミュニティ、コミュニティファームをテーマとして取り上げた学生が多かった。そこで二つのテーマに共通する事例として、自転車利用促進都市として名高いカリフォルニア州デービス市を、さらに同市内のブレッジホームズを研修地とした。事前学習ではデービス市、ブレッジホームズに関する文献を取り上げた。参加学生にとって事前に文献において目にした場所を訪れることは、きわめて新鮮な体験であり、触知的理解を得る重要な意義が感じられた。

2009年には農場体験をテーマとしてあげる学生が多かった。そのため農場体験型B&Bに宿泊し農場体験を行った。普段は体験できないアクティビティを通じて、農場とそのコミュニティについて学ぶことができた。2008年2009年は旧環境政策学科学生が対象であったために上記の様な個人テーマが取り上げられた。研修テーマの選択と各自の専攻はおおいに関係があった。また参加者数が4名、3名であったこと、全員が研究室所属学生であったことから学生が求めるテーマを指導することが可能であった。

2010年は新学科である環境科学科の学生が参加した。この年は研究室所属ではない学生が参加した。ディスカッションを重ねるなかで、自然景観をテーマとする学生が多かった。一例としてレッドウッドの巨木群生地をテーマとして取り上げた。文献についても同テーマを精読し、長い時間を群生地でも過ごした。

#### 4-3. 調査協力と研修の両立へ

以上の3回は大きな統一テーマのもと、学生の個別テーマを時間を掛けて定め成果を出すことができた。2013年、2014年および2017年は異なる仕掛けが必要になった。2013年と2014年調査は筆者を代表者とする科研費研究の調査に、学生が調査員として参加する形式である。以前のように個別テーマを定めることは困難であり、ともすれば「調査のお手伝い」になりかねなかった。そこで2013年調査では、3日間調査に協力してもらい、その他の活動としてニューヨーク州北部のフロストバレーYMCAを訪れ一泊二日でキャンプ場生活を体験した。このキャンプ場では日本語で事足りる。その他には鉄道旅行に関心ある学生の提案で、初めて寝台列車を利用して移動した。ゆっくりと流れる時間のなかで他の乗客との交流もあり、これまでとは異なる体験ができた。しかしながら、外へ外へと接触交流を積極的に行う学生と、内へ内へと学生間の居心地よさに向かう学生に二分してしまった。この点については個々の英会話能力と異文化経験に左右されてしまう。

2014年も同様に科研費調査であった。2013年調査では自然体験型キャンプに参加したが、上記の様な結果であり実施方針を改めざるを得なかった。そこで新たにリサーチャー体験を研修のテーマと位置づけた。筆者は社会調査法関連講義および実習を担当している。対面的な質的調査においては、コミュニケーション能力が求められる。安田三郎は「社会調査とは、一定の社会または社会集団における社会現象を、主として現地調査によって、直接に (*First hand*) に観察し、記述し (および分析)、する過程である。」と定義している。質的調査においては、情報提供者との信頼関係を構築し、傾聴を経て相手の意見に耳を傾けることが求められる (安田, 1980)。

2014年調査からはリサーチャーとして異文化に

関わることを統一テーマと位置づけた。換言するとファーストハンドのデータ収集である。この位置づけは2018年調査においても継続されている。例外として2015年については4年生2名が参加し、卒業論文の補充調査として聞き取り調査を実施した。科研費調査を行った2013年調査、2014年調査とは異なる位置づけになった。

統一テーマの変更は参加学生募集方法にも変化をもたらす。2013年および2014年調査は研究室所属学生を対象としたため、参加者募集や説明会は不要であった。2017年より筆者が動物応用科学科2年次後期「社会調査論」(必修科目)を担当しており、研究室所属学生に加えて、同科目において参加者を募集することとなった。募集方法としては、講義最終回に海外でのペットフレンドリーなコミュニティ調査の事例として、本研修旅行の15分程度の動画を再生し、次年度4月に参加希望者に対する説明会を行うと予告した。2017年調査では2017年4月昼休みを利用して複数回開催した説明会に、合計13名が参加した。4月以降事前学習に移行するなかで、参加者は6名になった。2018年調査では同様の募集告知を行い、説明会には合計16名が参加し、最終的には12名が参加した。研究室学生を対象とした研修旅行から、幅広く参加者を募ったグループツアーに変容した。

#### 4-4. 協力者の存在と引率者に求められること

振り返ると筆者にとっては、研修旅行に関するアドバイザー、協力者の存在なしには実施することは不可能であった。大学間協定に基づく研修旅行においても、少なくともはじまりにおいて、個人的な信頼関係がなくては協定締結には至らない。本稿のようなラボベースの研修旅行においても、個人的な信頼関係は不可欠である。筆者の場合在サンフランシスコの都市計画プランナー志賀宏記氏との信頼関係が特筆される。志賀氏とは30年来の友人であり、筆者が地域社会学専攻ことから研究上の交流が長く続いている。参加学生と訪れた、デービス市やユウリカ市は志賀氏のアドバイスと、同行の上でのディレクションなしには成立しえない。ラボベースの研修においては、この事が必須条件である。

さらに引率者である筆者に求められることは、小集団を対象としたグループワークの指導である。参



表4 環境社会学・地域社会研究室主催アメリカ研修旅行・調査旅行

実施年	テーマ	訪問地
2008年	持続可能コミュニティ	サンフランシスコ・デービス・ニューヨーク 8日間 4名
2009年	持続可能コミュニティ	サンフランシスコ・デービス・ユウリカ 8日間 3名
2010年	持続可能コミュニティ	サンフランシスコ・ユウリカ・デービス 9日間 3名
2013年	ペットフレンドリー調査	サンフランシスコ・NY・フロストバレー・シカゴ 11日間 5名
2014年	ペットフレンドリー調査	ニューヨーク・サンフランシスコ 13日間 3名
2015年	大都市コミュニティ	ニューヨーク・サンフランシスコ 8日間 2名
2017年	ペットフレンドリー調査	ニューヨーク・サンフランシスコ 17日間 6名
2018年	ペットフレンドリー調査	ニューヨーク・サンフランシスコ 16日間 12名

加学生のモチベーションを高め、モラルを維持することが指導目的である。筆者が研修旅行におけるディレクターシップとして、いつも心がけていることは、「指示や注意事項は必要となる直前に、注目を十分に引きつけて行うこと」「場合によってはメモを取らせ復唱させること」「適応していない学生に対して十二分に注意を払うこと耳を傾けること」「一時間後、半日後、数日後について具体的な見通しを持つこと」「常に目的と意図が明確に説明され、盲従を避けること」「アナウンスメントとインフォメーションについてことなる位置づけをすること」である。アナウンスメントは大きな変容のない告知である。一方でインフォメーションは状況の変化に応じて、行動や持ち物について大きな変化がある警報である。この様に研修旅行引率者には小集団指導やグループワークの方法を学ぶことが求められる。

この様なリサーチャーとしてのモチベーションを高める工夫は、回収した有効票数にも表れている。2013年調査では41票、2014年調査では33票、2017年調査では119票、2018年調査では161票を集めることができた。調査を実施した日数については、2013年が学生5名で3日、2014年が学生3名で5日、2017年が学生6名で5日、2018年は12名の学生を2人ずつの6グループに編成して5日実施した。またテクノロジーの進歩により、従来行ってきた地図の印刷配布と持参は一切不要になり、学生が最適な交通機関選択と経路をその場で検索できるようになった。この点は今後海外研修旅行を実施するうえで、大きな助力となると考える。しかしながら、事前学習段

階では、印刷された地図は地理理解を構築する上で有効である。

#### 4-5. 学生の感想評価 2008年から2017年

いずれの年度も学生レポート集を刊行している。このレポート集から参加学生による感想や評価の一部を引用する。

##### < 2008年参加者 >

- ・今回初めてアメリカに行き、今のアメリカの状況というのを見たが、イメージしていたより暗い感じがした。これもリーマンショックによる不況の影響なのだろうか... 逆に好景気になった時にもう1度行って違いを見てみたい。
- ・初めての海外旅行だったが、かなり舞い上がってしまったし、次の旅行で活かしたい事がたくさんあった。例えば事前の準備をもっと早めにやるとか、情報を頭にちゃんと入れておくとか。後悔もたくさんあったけれど得たものの方が圧倒的に多いと思う。
- ・初めての海外で右も左もわからずすべてが初めての経験でしたが、本当に貴重な体験ができました。

##### < 2009年参加者 >

- ・今回このアメリカ研修旅行は、私にとって初めての海外旅行だった。すべてのことが初めてで、とても良い体験ができてよかった。
- ・今回の旅行は本当に盛りだくさんでとっても楽しくて絶対に忘れられないものになりました。今までにない感動がたくさんあり思い出だけで幸せな気持ちになれます。



写真 20 (左) および写真 21 (右) 調査中の様子 バークレイ市、ブルックリン市にて

#### < 2010年参加者 >

- ・日本に帰ってきたー!この9日間とても充実していて、時間を長く感じました。全てが初めてのことで、とても楽しかったし、得るものも多くありました。アメリカ旅行行って本当に良かった!
- ・充実した1週間を過ごせたので大満足だ。しかし、英語をもっと理解できて、話せていたらもっと充実していたはずだ。「英語をもっと話せたら…」という感想はありきたりだが、本当にそうだ。言葉の壁は高かった。この旅をきっかけに英語をもっと理解して、話せるようになりたいと強く感じた。

#### < 2013年参加者 >

- ・今回の研修では実際には参加できない自分を、参加させていただいたことに感謝の念しかありませんでした。…真のグローバル人材は、自分の意思で世界へ飛び込んで、見る、聞く、触れる、失敗することを沢山してきた人のことだと思いました。
- ・最初の方は風邪を引いたりして辛かったが、やっとアメリカに慣れてきたという時に帰らなくてはならないのは寂しい。必ずもう一度アメリカに来なければならないと強く感じた。
- ・終わってみたらあっという間の10日間でした。初海外は自分にとって、すごく良い体験になりました。想像していたよりも言葉の面や、文化の違いなどに苦労しましたが、同じ研究室のみんなと楽しく過ごせて、無事に帰って来られて良かったです。



写真 22 調査中の様子 ブルックリン市にて

- ・メンバーも良いメンバーだったのでとても楽しかったです。ちゃんと日本にサンプルを持って帰れてよかったです。

#### < 2014年参加者 >

- ・今回は調査2年目という事もありどことなく自分に余裕が出来スムーズに自由時間や調査をすることができました… もっと語彙を増やしてもっと英語を使えるようになりたいです。
- ・日本との文化の違いに困惑してしまいましたが、勉強になりました。そして、トイレを探すのが上手くなった気がします。現地の人と沢山話す機会や観光地に行けて楽しかったです。また海外旅行したいです。
- ・今回、2回目のアメリカの旅は普通の旅ではでき

ない経験をたくさんしました。基本的に先生が案内してくれるところについていった旅なので、自分では行かないようなところも多くあり、とても楽しかったです... 帰国直後は、しばらく海外旅行はもういいと思っていましたが、また最近になって行っても良いかなと思い始めています。

#### < 2015年参加者 >

- ・ あっという間の旅すぎて帰国した実感が沸かなかったのが不思議に思った。海外旅行を学生のうちに体験できたことは、大きな意味があったと思う。

#### < 2017年参加者 >

- ・ (調査に) 協力してくれる人はみんな優しく、別れ際に見せてくれる笑顔が次の調査のモチベーションに繋がった。...楽しい思い出もいっぱいあるが、調査も苦戦した1番頑張った思い出として強く印象に残っている。
- ・ 新しい目標もたくさん生まれました。実際に体験してみないとわからないことがたくさんあり、アメリカの良いところも悪いところも見れた気がします。
- ・ この調査旅行を一言で締めくくると、Better hazard once than always be in fear.
- ・ 十分過ぎるほど沢山吸収することができて本当に行って良かったなと思います。この体験は今後絶対に活かされていくものだと感じました。

#### 4-6. ツアー体験をもとにした卒論リスト、レポート集

研修体験をもとにして提出された卒業論文としては以下のものがあげられる。2010年および2012年卒業論文4本は、3年次に参加したフィールドワークでのデータをそのままデータとして用いて、さらに必要な統計データを加える形で執筆されている。研修旅行が卒論と直結したものと位置づけられる。

2015年2016年卒業論文3本は、多少論文テーマとフィールドワークデータの関係が異なる。執筆段階の計画通りに書き進め、フィールドワークでのデータを論旨を補強するものとしている。この点で違いが見られる。

中井川絢香. 2010. 「持続可能な社会における環境保全——生活環境とマクロ経済を繋ぐもの」2009年度環境政策学科卒業論文

藤池徹. 2010. 「日本の自転車政策の可能性——環境改善、健康改善へ」2009年度環境政策学科卒業論文

田平美由貴. 2012. 「環境に配慮したまちづくり——コミュニティ形成の重要性について」2011年度環境科学科卒業論文

大塚亮介. 2012. 「Forest and Human Life——環境意識の原点 カリフォルニア州でのフィールドワークから」2011年度環境科学科卒業論文

泉山萌. 2015. 「人間の生活環境が及ぼす、ヒトと犬間での歯周病伝播様式の解明」2014年度環境科学科卒業論文

齋藤一樹. 2016. 「動物飼養と防災のあり方に関する試論——飼い主と非飼い主が共存できる避難所づくりのために」2015年度環境科学科卒業論文

秋山友香. 2016. 「女性労働者と子育て」2015年度環境科学科卒業論文

改めて参加学生の感想評価と卒業論文への結実をみると、研修旅行参加による学生の劇的な変化というよりも、自ら抱いていた環境にたいする漠然とした疑問や関心を言語化・言語化するきっかけであるように思う。また、英会話についての失敗や文化慣習に対する理解不足があげられているが、それらは不安を感じながらも個々に乗り越えたのだという実感の表れである。

参加者の一人は、この研修参加体験をきっかけに、卒業後新たな外国語能力取得のため、語学留学を経て海外での生活を重ねている。学生にとって研修ツアー参加の意義は漠然と持っていた可能性を、それぞれのライフコース上に布置するきっかけとなっていることと考える。



## 5. 海外研修参加による学生の変容と成果の パブリケーション

大倉健宏, 原田 公, リンチ・ジョナサン

### 5-1. 準備と事前学習

大倉、リンチ、原田の三研究室では、「卒業論文」という3・4年生の専門科目の一環として、8月と9月の夏季休業期間を利用した海外研修を実施している。研修にかかる費用や学生個人の日程都合もあることからゼミ生の参加を義務化していない。一方で、学生の中には二年続けて研修に参加する者もいる。3年生を対象としたゼミでは、基本的に前期は研修に関連する文献を渉猟する以外に、研修の準備・事前学習をおこなっている。その取り組み方は三研究室で多少異なるが、いずれの研究室も、訪問国に関するビザ・入国手続き、治安・安全情報などの基本情報を与えるなどして、不慮の事故を避けるような手立てをとっている。文化や宗教上の事情も日本と異なる。国際コミュニケーションの二研究室の場合、現地住民宅でのホームステイや民泊という滞在スタイルを取るため、日常生活の慣習事項についても日本との主な違いを中心に説明している。また、環境社会学研究室・地域社会学研究室においては、アメリカ都市文化に焦点を絞り、下位文化を見る視点の構築を目指した事前学習を心掛けている。

特別講師の招聘も前期の事前研修でおこなわれる。リンチ研究室がツアーコーディネーターのオトマンスキ氏を呼んで、ツアーに備える実務的な研修をおこなうのもこの時期である。原田研究室ではやはり前期に、インドネシア、マレーシアの地域研究の専門家、先住民社会研究に通暁した他大学の教員を招いて、参加学生に専門的な知見や情報を提供する機会を設けている。

### 5-2. 旅行中における参加学生の変容

参加学生には一人で参加の意思を表明する者と、友達と一緒にならば、という形で参加を表明する者がいる。旅行中の行動もそれぞれであり、一人での行動を好む学生と友人と片時も離れない学生がいる。いずれであっても、出発直後は旅行の興奮がまずやってくる。そしてどちらであっても到着した初日や2日

目には異文化になじめず、不適応を起こす場合がある。海外旅行経験が多い方が適応するとは言い切れないが、ある程度の不適応は必ず見られる。引率者はそんな姿を見て、学生を前に押し出そうとすることがある。このことがうまく運ぶこともあれば、逆効果の時もある。このような時には、無理強いをせず、学生の適応が増すのを待つべきであろう。熱心にすすめながら、あとは待つという姿勢である。不適応な状態の学生ほど、日本食に惹かれるのも特徴的である<sup>注1</sup>。このような場合は引率者が一対一で話し適応を言葉で吐き出させることが必要になるだろう。

いい経験を積み、会話に慣れはじめると、学生は身の丈以上に急激に体験のサイズを広げようとする。こうした場合には引率者から自制を促すことが必要である。引率者が早く休むように促すのはこのためである。特に最終日夜などは盛り上げすぎないことが大切であろう。

適応と疲労の関係の中で少しずつ変化が見られる。それを見守るのが引率者の役割である。ほとんどの参加学生の感想などを見ると、二度と行きたくないという言葉はない。書きたくないこともあったのだろう、体験をまとまりきらない言葉であっても、言語化することで、乗り越えることがあると考える。

### 5-3. 参加者自己評価の方法と報告

ツアー後の活動はたんに研修のフォローアップにとどまらず、卒業論文という大きな目標にとって大変に重要なステップでもある。9月、10月に学生は各自自己評価を行い、フォローアップレポートを作成する。また、経験と新しく得た知識を幅広い多くの層と共有するため、学園祭を利用して合同報告会、展示会を開催する。

リンチ研究室では、サンゴ礁に焦点を当てた海外研修に参加した学生の場合、学生が研究室のアンケートフォームを使用して、オンライン調査ツールを使って自己評価を実施する。ツアー中にどのような問題が発生したのかといった実務的な質問の他に、英語のコミュニケーションに関する質問も設定されている。海外研修が自らの価値観や考え方にどのような影響を与えたかについて、自由回答形式で回答が求められる。

三研究室合同の事後活動として本学の学園祭期

間中に研修報告会を実施している。参加学生は各自が選んだトピックでプレゼンテーションをおこなう。一般の来訪者のほかに、研修に参加した学生の父母も足を運んでくるため、研修自体の目的や意義を家庭レベルで理解してもらう上でも良い機会となっている。また、国際コミュニケーションの二研究室では過去数回にわたって、やはり学園祭に合わせて学生による展示企画をおこなった。小学生から高齢者まで幅広い層の来場者を想定し、手で触れられるハンズオンスタイルも取り入れて、現地で起こっている環境問題をなるべくわかりやすく解説した展示内容は多くの来訪者を集めた注2。

#### 5-4. 継続的な実施に向けて

三名の教員は海外研修の意義を在学時に研修に参加した卒業生の進路やキャリア選択の実績から確信している。環境管理学をより専門的に学ぶために豪州の大学院に進学した者、青年海外協力隊としてアフリカのセネガルに赴任した卒業生がいる。ただ、このように海外研修が卒業後の進路に直接的に影響している例は少ないだろう。しかしたとえば一般企業の営業職に就いている卒業生にしても、研修で培ったさまざまな経験値や広げられた価値観は現在のキャリアの中でも活かされているはずである。卒業後に研究室を訪問してゼミ生にかつて自分たちが参加した研修の意義を説く者は少なくない。現役生に交じって研修に参加する「リピーター」も中にはいる。卒業生にとって海外の研修で体験したリソースの大



写真23 2009年11月の合同報告会ポスター

きさが実感されている証拠である。身近なゼミ先輩から語られる、教員の目線からは見えにくいリアルな体験談はじつは、インセンティブを高める一番大きなきっかけになっているかもしれない。

日本の若者の《内向き志向》についてはさまざまな議論がなされている。ただ、海外留学生の減少傾向を考えると、ただ《内向き志向》のみをもって論じるべきではないという向きもある。たとえば太田は、大学による学事暦や単位認定などの硬直した運



写真24 (左) および写真25 (右) 国際コミュニケーション二研究室による学園祭での展示企画

用や新卒一括採用制度という日本企業独自の雇用慣行といった、現在の日本社会全体の有り様が減少のひとつの要因であると述べている(太田, 2014)。グローバル人材の育成はいまの日本の大学がその対策を求められている大切な課題である。こうした学生の気質の変容や社会的な情勢の変化に対応をする中で、《海外研修》を設計・運営する教員も試行錯誤を重ねていかざるを得ない。研究室という小さな単位による試みだが、海外に教育と研究のフィールドを求める《海外研修》はそこに参加する学生たちに貴重な学びの機会を提供できるものと信じている。

注1 いささかハウトゥー的になるが、食事不適應な学生を考慮して筆者が持参するのは、素麺等と麺つゆである。カップ麺は広く市販されている。

大倉が引率したツアーは、科研費研究「ベットフレンドリーなコミュニティの条件—コミュニティ疫学試論」(挑戦的萌芽研究 課題番号 24653128 代表者大倉健宏) 2012年-2014年、および文部科学省私立大学研究ブランディング事業「動物共生科学の創生による、ヒト健康社会の実現」におけるプロジェクト、大倉健宏、「ベットフレンドリーなコミュニティの条件—アメリカ・相模原におけるコミュニティ疫学調査の実施と「ミニ・パブリック」を対象とした「討論型世論調査」(Deliberative Poll DP)の実施」2016-2020年による助成を受けています。

注2 以下は、一般の人でも参加が可能な「自然環境の保全」をテーマとしたツアーを主催している団体によるツアー情報の一部である。

*Earthwatch Expedition Guide* 2017. Earthwatch Institute: accessed 20 August 2017,

[https://issuu.com/2016earthwatchfieldresearchexpediti/docs/2017\\_ew\\_expedition\\_guide](https://issuu.com/2016earthwatchfieldresearchexpediti/docs/2017_ew_expedition_guide);

*Coral Cay Conservation Expeditions Brochure* 2017.

[www.coralcay.org](http://www.coralcay.org): accessed 20 August 2017,

<http://www.coralcay.org/app/download/5781174568/CCC+Brochure+V.1.2017.pdf>

*EF Tours Brochure*. EF Education First International Ltd.: accessed 20 August 2017, <http://www.eftours.com/web-hp-mats-top>

#### 引用・参考文献一覧

##### 【2章】

Ashley, C., Boyd, C., & Goodwin, H. 2000, "Pro-poor tourism: putting poverty at the heart of the tourism agenda" *Natural Resource Perspectives* No. 51.

井上真, 2012, 「現場からデータを読むことの意味」『2012年版 JATAN 森林白書』所収 熱帯林行動ネットワーク (JATAN)

##### 【3章】

Bien, A, 2003, "A Simple User's Guide to Certification for Sustainable Tourism and Ecotourism" *The International Ecotourism Society (TIES)*.

Hesse, Stephen, 2002, "Eco-tour program puts priority on people" *Japan Times*; accessed 20 August 2017, <https://www.japantimes.co.jp/life/2002/01/10/environment/eco-tour-program-puts-priority-on-people/>

Neale, Gregg, 1999, "The Green Travel Guide" *Routledge*: 43-50.

##### 【4章】

Corbett, Judy and Michael Corbett, "Designing Sustainable Community; Learning from Village Homes" *Island Press*.

Tell, Johan, 2008, "100 Ways to save The World" *Gold St. Press*.

安田三郎, 1980, 『社会調査ハンドブック [新版]』有斐閣双書.

##### 【5章】

太田浩, 2014, 「日本人学生の内向き志向に関する一考察: 既存のデータによる国際志向性再考」*留学交流* 40.